

はじめに

東京はかつて水の都といわれ、都市の産業・経済も生活・文化も水との密接な関係をもっていた。戦後長らく水辺の空間が無視され続けたが、近年、人々の都市環境への関心の高まりと産業構造の変化を背景に、東京の水辺空間が大きな注目を浴びつつある。

隅田川の水上バスに加え、江東の掘割にも水上バスが運航を始め、人気を呼んでいる。また、隅田川の浅草のすこし上流に「桜橋」がかけられ、そのたもとは、評判の悪かったカミソリ堤防の一部を切って、階段で水際まで降りられる親水護岸がつくられた。下町のタウンスケープにとって重要な、橋の色の塗り変えもあちこちで進められ、水辺の風景が生彩を取り戻している。

同時にまた、東京湾のウォーターフロント（水辺）の空間に対する関心も、急速に高まっている。お台場公園でのウィンドサーフィンといった遊びの要素に加え、ロフト（倉庫）を改造したギャラリー、芝居の稽古場、さらにはカフェバーなどの登場で、文化の場としても人気を集める水辺は、まさに都市のパフォーマンス空間となりつつある。このように、「水の都」東京が、再び水辺の魅力を回復しつつある。

ところが一方、現実の都市の動きの中ではこのウォーターフロントに、国際化・情報化の巨大な波が押し寄せてきている。倉庫や産業施設の跡地がオフィスの建設用地として脚光を浴び、再開発の舞台となって都市風景が急速に変わろうとしている。

こうして、東京の水辺に対して、近年様々な立場から人々の関心が著しく高まっているにもかかわらず、これまでその都市空間の実態についてはほとんど系統的な調査研究が行われていない。本研究は、東京の水辺の空間のうち、歴史的に特に重要な都心部の「隅田川」「日本橋川」を主たる対象として、その河川、掘割に沿った地域の土地利用と景観構造を歴史的な視点を導入しながら調査・分析し、今後の都心におけるすぐれた水辺の都市環境の創出に向けての基本的認識を得ることを目的としている。特に、水の都であった江戸における水辺の空間の在り方を復元的に描き出し、さらにモダニズムの時期（大正後期－昭和初期）に展開した水辺でのアーバン・デザインを再評価することを通じて、現在都市の空間軸としてほとんど意識されなくなっている水辺空間の復権への手がかりを探っていきたい。